

乳牛への飼料用玄米給与

食の安全・安心に対する消費者の関心が急速に高まり、輸入飼料に頼らない国産飼料での畜産物の生産が求められています。また、酪農における飼料価格の高騰対策として、自給飼料や食品製造副産物等の給与割合を高めることにより、十分な乳生産が得られ、かつ生乳生産費の低減が図れる飼料給与技術が望まれています。そこで、飼料用玄米、イネWCS及び生米ぬかなどの食品製造副産物を有効活用し、国産飼料100%給与を目指した牛乳生産技術を開発するために今回は、飼料用玄米の給与割合の違いが泌乳前期の乳生産に及ぼす影響について検討したので、その結果を紹介します。



項目 \ 試験区	25%	30%
配合割合		
飼料用玄米 (粗挽き)	25	30
イネWCS	25	25
チモシー乾草	10	10
試験用配合飼料	40	34
大豆粕	0	1
計	100	100
成分含量 (設計値)		
可消化養分総量	76.9	77.6
粗タンパク質	18.8	17.6
中性繊維	35.1	33.7
粗脂肪	3.0	2.9
デンプン	20.5	24.4

項目 \ 試験区	25%	30%
供試頭数	3	3
乾物摂取量 (kg/日)	25.3	25.3
乳量 (kg/日)	45.1	45.8
乳脂率 (%)	3.99	4.58
乳タンパク質率 (%)	2.91	3.07
無脂固形分率 (%)	8.47	8.63
乳中尿素窒素 (mg/dl)	20.9	22.9
分娩後1~10週平均		

泌乳前期の乳牛6頭（2産以上）に、乾物比でイネWCS25%、穀類を含まない試験用配合飼料及び大豆粕に粗挽きした飼料用玄米25%（25%区3頭）、30%（30%区3頭）を加えた試験飼料（2試験区）を調製し、分娩後10週間試験飼料を完全混合飼料(TMR)で給与しました（表1）。また、国産飼料乾物給与割合は25%区で60%、30%区で65%でした。

結果は、2試験区とも乳生産への影響は認められず、30%区では、飼料用玄米で濃厚飼料の46%の代替が可能であり、1日1頭当たり平均45kgの高い乳量でした（表2）。

第一胃内容液、血液性状の分析値は、2試験区とも正常な値の範囲内にありました。

乳飼比、乳代金及び乳代金一飼料費（粗収益）も2試験区に差はありませんでした。

他の試験場（新潟県、三重県）でも同様な飼料用玄米の給与量割合で試験を実施しましたが、本県と同じ試験成績が得られています。

以上のことから、イネWCSを粗飼料の主体とし、加工形態を粗挽きとした飼料用玄米を乾物比で30%混合したTMRの給与では、泌乳前期の乳生産に及ぼす影響はないことが明らかとなりました。

（乳牛飼養研究室）